



〔第71回企画展示〕

酒田港500年祭特別展



酒田港繁昌図・大宮白鳥神社

開催期間 平成4年7月16日(木)～9月27日(日)
 開館時間 午前9時～午後4時30分
 休館日 なし
 入館料 おとな100円・児童生徒50円
 65歳以上の方と身体障害者の方
 方は無料です。

酒田市立資料館

酒田市一番町8-16 TEL(0234)24-6544



百人女姿・さかたごひいき
いままち女子しゅ

【プロローグ】

陽はまた昇る

酒田は、日本海と最上川の出会う河口湊を拠点に、広く豊かな最上・庄内の各河川の流域を後背地とし、日本海を舞台に発展の起伏をくり広げてきました。

古くは、遠く日本海の波濤を越えてやって来た人々があり、奈良、平安時代には、出羽国の中枢となる機関が近くに集まり、港はその玄関口としての役割も果たしていたことであろう。

けれども日本海に注ぐ天然の河口港は、川筋が定まらず、あるいは南に、あるいは北にと、港の発祥の地も、時期も特定することはできませんが、1492年（明応元）頃に、対岸の当酒田への移転の機運が起こり、1521年（大永元）頃までに、一応本町通りが出来、港は大きく発展していくのです。

いらい500年の歳月が流れました。この間酒田は、日本海岸の港町として、交易や日本海警備、城米の輸送、軍船の調達などに重要な役割をになっていくのです。特に1672年（寛文12）、幕命により河村瑞賢が酒田港を基地として天領米を輸送するために、これまでの西廻り航路を整備したことから、酒田は「諸国往還の津」として飛躍的な発展を遂げるのです。最上川の流域からは、米やべにばな、青苧、ロウ、漆などが川を下

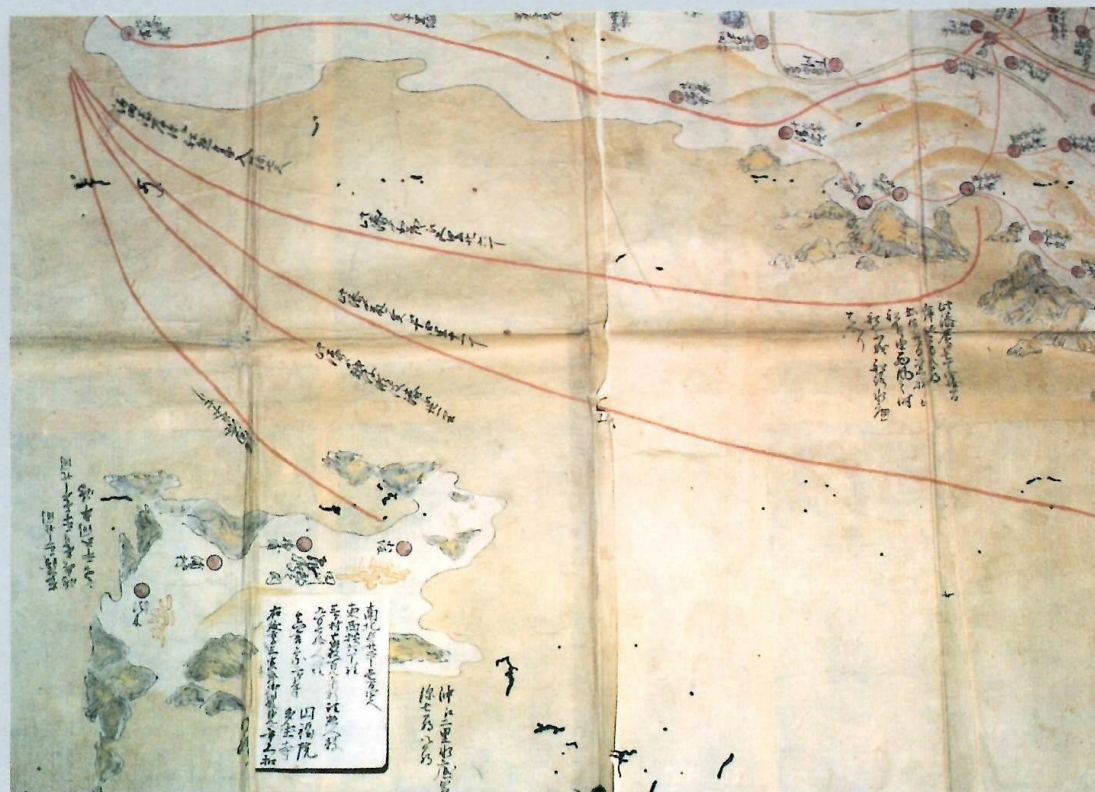
り、関西の塩や反物、古着、たたみ表、小間物、北海道の塩鮭、干し魚などが、内陸へ運ばれていきました。これらの交易は、三十六人衆と称された酒田商人の手によって取り引きが行われました。江戸中期にこれらの回船問屋は、本町通りを中心に97軒を数え、蔵には200万両分の物資が詰まっていたといわれています。南部藩の定宿として日本海交易に活躍した加賀屋（二本家）、「北の国一番の米の買い入れ問屋」と『日本永代蔵』に記された笠屋、日本一の大地主本間家など全国にその名を知られた豪商もいます。

時は移り、明治の文明開化とともに鉄路の北上、帆船から蒸気船への転換などで、最上川舟運と港の機能は急速に衰退を余儀なくされ、加えて県庁の統合や明治27年の酒田地震による船場町一帯の壊滅的な打撃など、不振の要因は数々ありましたが、昭和4年に重要港湾に指定されてから好転し、幾度か困難を乗り越えて、現在は国際貿易港として脚光を浴びています。

わたしたちは、今開港500年をバネに再び「環日本海時代」に向かって、新たなる希望の船出をしようとしています。

『温故知新』この願いをこめて、今回は『酒田港と人と文化と』をテーマに、歴史ファンタジーも加えて特別展示を構成しました。特に山形大学や遊佐町をはじめ、多くの方々から貴重な資料をご出陳いただきました。厚くお礼を申し上げます。

酒田山王例祭図 五十嵐雲嶺筆



出羽国庄内領絵図、酒田湊航路図・元禄12年